

多くの人に支えられて

「与えられる役柄はさまざままで、演じる職業が一緒であっても、時代や地域の設定が違えば、行動も変わってきます。その時、その場所の文化や立ち振る舞いなどを日々勉強しながら、一つ一つ役と向き合う毎日です」と自身の生活を振り返る津村さん。

高校の学校祭で行われたクラス対抗の演劇コンテストでの主演をきっかけに、演じる楽しさを知ったという津村さんは、演劇の基礎を学ぶため、都内の専門学校に入学。同じ夢をもつ仲間と共に芝居の腕を磨いてきたといいます。

津村さんは、「最近になって、少しずつ仕事をもらえるようになってきましたが、数年前までは、アルバイト収入で生活していた」と言い、年を重ねるごとに、違う道に進んでいった仲間が多くいる中、「がむしやりに演劇を続けてきたのは、やはり芝居が好きだからなんだと思います」と笑顔で話してくれました。

「舞台であれば、何十人という裏方に支えられながら、公演に向けて共演者と対話し、時間を掛けて作り上げます。そこでしか味わうことのできない空間が大きな魅



▲『雪虫』で札幌市出身の犬飼淳治さんと共に演じる津村さん（右）

力だと思うので、演劇を観賞する機会があれば、ぜひ見ていただきたいですね」。

望郷の思いが育む

「札幌市出身の俳優と意気投合し、ふるさとに何かできることはないかと考えた結果が演劇集団『道産子男闘呼倶楽部』でした」という津村さん。出演者はもちろん、作家や演出家など、北海道にゆかりのある人たちだけで構成する同集団は、ふるさとを離れて培ってきたものを『演劇』という形で伝えていくといいます。

「現在、公演している『雪虫』は、登別市を舞台にした人間ドラマ。市内で生活されている方にとって普段の生活に近い舞台に感じてもらえるはず」と語る津村さんは、今日も俳優としての道を歩み続けます。



KIRARI

つむらのりよし 津村知与支さん（東京都）

映画やテレビドラマなどで目にする『俳優』。子どもの頃に学芸会などで、役を演じたことはあるものの、多くの人にとって、遠い存在の職業の一つではないでしょうか。

そんな『俳優』を夢見て登別市内で育ち、現在、職業としてその道を歩んでいる人がいます。今号では、テレビや舞台などで、幅広く活躍する津村知与支さんに、役を演じる魅力について伺いました。

『舞台で生きる』その一瞬一瞬を追い求めて



昭和50年、登別市生まれ。43歳。

室蘭栄高等学校卒業後、上京し、俳優の市村正親さんや作家の五木寛之さんなど、数多くの人材を排出した『舞台芸術学院』に入学。在学中に劇団『モダンスイマーズ』の旗揚げ公演に参加し、その後入団。現在、さまざまな舞台やテレビドラマなどに出演する。平成26年には、北海道出身者で構成される演劇集団『道産子男闘呼倶楽部』を結成し、活動の幅を広げる。